

な か  
那 珂 77

—那珂遺跡群第161次調査報告—

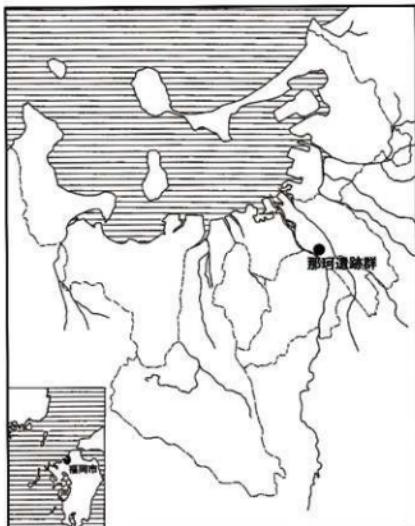
2018

福岡市教育委員会



NA KA  
那 珂 77

—那珂遺跡群第161次調査報告—



遺跡略号 NAK-161  
調査番号 1614

2018

福岡市教育委員会



## 序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は、開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は、保育園建設に伴い博多区那珂1丁目地内で実施した那珂遺跡群第161次調査の成果を収めたものです。

今回の調査では、弥生時代中期の円形竪穴建物、同後期の方形竪穴建物、古墳時代後期の掘立柱建物・溝が見つかりました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが調査委託者様をはじめ関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げる次第です。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会  
教育長 星子 明夫

## 例　言

- 本書は、保育園建設に伴い福岡市博多区那珂1丁目地内において実施した那珂遺跡群第161次調査の報告である。
- 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。  
ピット　S P　掘立柱建物　S B　竪穴建物　S C　溝　S D　土坑　S K
- 遺構の実測は木下博文が行った。
- 遺物の実測は木下博文が行った。
- 遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
- 製図は木下博文が行った。
- 本書で使用した方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$  西偏する。
- 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
- 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

|                             |              |                          |
|-----------------------------|--------------|--------------------------|
| 調査番号　1614                   | 遺跡略号　NAK-161 | 分布地図番号　0037 東光寺          |
| 所在地　博多区那珂1丁目442-1、442-5、439 |              | 調査面積　240.0m <sup>2</sup> |
| 調査期間　2016.7.11～10.3         |              |                          |

## 本文目次

|                    |    |
|--------------------|----|
| 第1章 はじめに .....     | 1  |
| 1 調査に至る経緯 .....    | 1  |
| 2 調査体制 .....       | 1  |
| 第2章 遺跡の位置と環境 ..... | 1  |
| 第3章 調査の記録 .....    | 5  |
| 1 調査の概要 .....      | 5  |
| 2 遺構と遺物 .....      | 5  |
| 3 まとめ .....        | 12 |
| 図版1~9              |    |

## 挿図目次

|  |    |
|--|----|
| 図1 遺跡の位置 (S = 1/25000) .....                       | 2  |
| 図2 調査地点位置図 (S = 1/2000) .....                      | 3  |
| 図3 調査区配置図 (S = 1/200) .....                        | 3  |
| 図4 調査区平面図 (S = 1/150) .....                        | 4  |
| 図5 S C 0 5 および出土遺物実測図 (S = 1/80、1/2) .....         | 6  |
| 図6 S C 0 6・0 9 実測図 (S = 1/80) .....                | 7  |
| 図7 S K 0 8・1 0 および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/3、1/2) ..... | 8  |
| 図8 S D 0 1・0 2・0 3・0 4・1 2 実測図 (S = 1/80) .....    | 10 |
| 図9 S D 0 3 出土遺物実測図 (S = 1/3) .....                 | 11 |
| 図10 S B 1 8 実測図 (S = 1/60) .....                   | 12 |

## 図 版 目 次

- 図版1 1区全景（南西から） 2区全景（南西から）
- 図版2 S C 0 5・0 9（東から） S C 0 9（北から）
- 図版3 1区 S C 0 6（北から） 2区 S C 0 6（南から）
- 図版4 S K 0 8（西から） S K 1 0（南東から）
- 図版5 S D 0 1（南東から） S D 0 2（南東から）
- 図版6 S D 0 3・0 4（南東から） S D 0 4・1 2（南東から）
- 図版7 S B 1 8（南西から）
- 図版8 出土遺物1
- 図版9 出土遺物2

## 第1章 はじめに

### 1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成26（2014）年11月13日付で、個人より博多区那珂1丁目442-1、442-5、439地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号26-2-721）。同地は那珂遺跡群の範囲内であることから、同年11月25日に試掘調査を実施し、地表面下40cmで遺構を確認した。

その後同地内で保育園建設が計画されることとなり、その基礎工事内容は残存遺構への影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、平成28（2016）年7月11日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。7月15日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、平成28（2016）年10月3日に終了した。

なお調査範囲は基礎工事が行われる建築物の範囲であり、それ以外については現状保存されている。

### 2 調査体制

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査 平成28年度 資料整理 平成29年度）

調査総括 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課長 常松幹雄（平成28・29年度）

同課調査第1係長 吉武学（平成28・29年度）

庶務 埋蔵文化財課管理係長 大塚紀宣（平成28年度）

管理係 入江よう子（平成28年度）

文化財保護課管理調整係 松尾智仁（平成29年度）

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 佐藤一郎（平成28年度）

本田浩二郎（平成29年度）

同課事前審査係主任文化財主事 池田祐司（平成28・29年度）

同課事前審査係 板倉有大（平成26年度）

清金良太（平成28・29年度）

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係 木下博文

## 第2章 遺跡の立地と環境

那珂遺跡群は、那珂川と御笠川に挟まれた標高7～10mの段丘上に立地し、阿蘇山火碎流起源の鳥栖ロームおよび八女粘土層を基盤とする。

この段丘上には、弥生時代中期の王墓が発見された須次岡本遺跡を含む南東の春日丘陵に至るまで、五十川・諸岡・井戸の諸遺跡が連続している。東には農耕開始の村跡である板付遺跡、水田跡の東那珂遺跡、大型掘立柱建物跡や鮮やかな漆塗り製品の雀居遺跡などが点在する。特に北西に隣接する比恵遺跡群との一体性が強く、弥生時代の遺跡の集中が著しいことから、かつて「勞生銀座」とも評され、「奴国の中核部」と見られている。

続く古墳時代初頭には、中心部に那珂八幡古墳が築造される。同古墳は全長75m以上の前方後円墳で、昭和59・60年度に確認調査を行っている（6次調査）。その結果前方部が撥形に開く古い様相を示し、奈

良県桜井市・箸墓古墳と類似していることが明らかとなった。墳頂部に神社社殿が建っており、主体部は一部未発掘であるが、検出した2基のうち1基の木棺内から三角縁神獸鏡1面が出土している。同古墳を基軸として比恵遺跡群まで直線的に伸びる2本の並列溝は、道路跡として注目されており、それに沿って墳墓群が並ぶなど都市計画の存在が指摘されている。

古墳時代後期～終末期には、大和政権の主導で那津官家が設置され、その場所は現在比恵遺跡群内に指定されている。その後律令の導入により中央集権国家の整備が次第に進む頃、那珂遺跡群内には真南北および東西方位を軸とする溝が各所で造営されており、広域的に土木事業が実施されている。官衙や寺院を想定させる瓦の出土も目立つようになる。

弥生～古代までの遺構の密度と比較すると低いものの、中世には屋敷地を囲ったかともみられる堀・大溝も造営されており、全容の解明が待たれる。

今回の調査地点は遺跡のほぼ中央に位置し、那珂八幡古墳の東約100mの地点である。北側に隣接する都市計画道路竹下駅前線の敷設時に発掘調査をおこなっており（13次調査）、弥生時代中期の円形竪穴建物、弥生時代後期～古墳時代後期の方形竪穴建物・掘立柱建物・井戸、古墳時代～中世の溝、平安時代末期の木棺墓を検出している。今回の調査では以上の遺構の延長・広がりが予測された。

6次調査 「那珂八幡古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第141集 1986

13次調査 「那珂2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第222集 1990

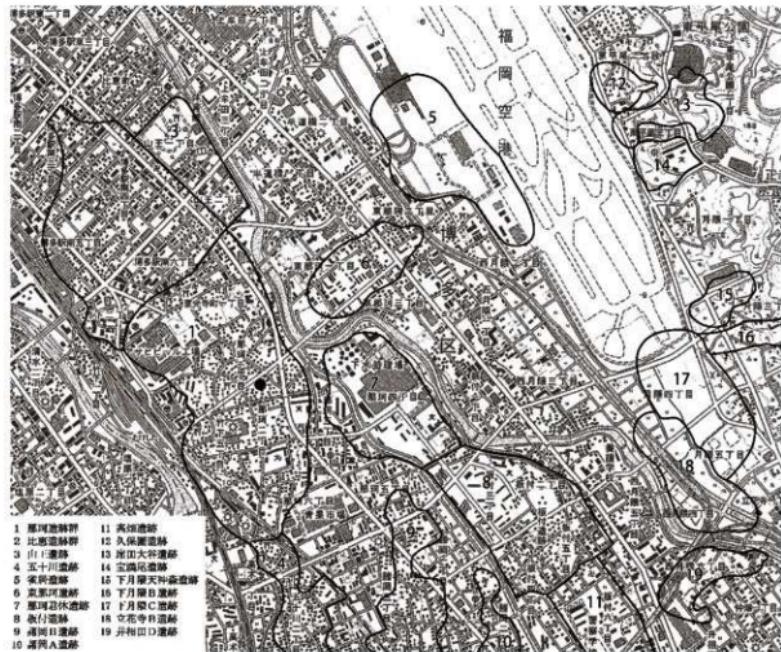


図1 遺跡の位置 (S = 1/25000)

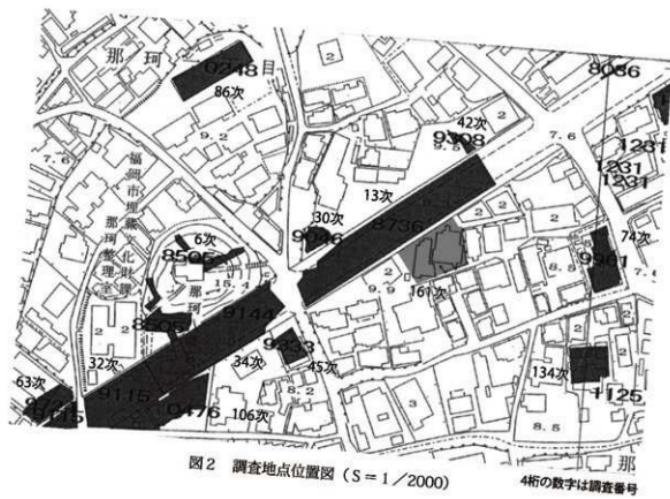


図2 調査地点位置図 ( $S = 1/2000$ )

4桁の数字は調査番号

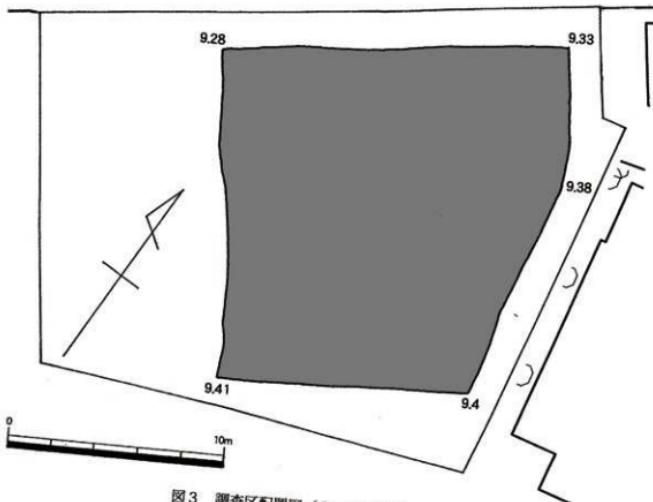
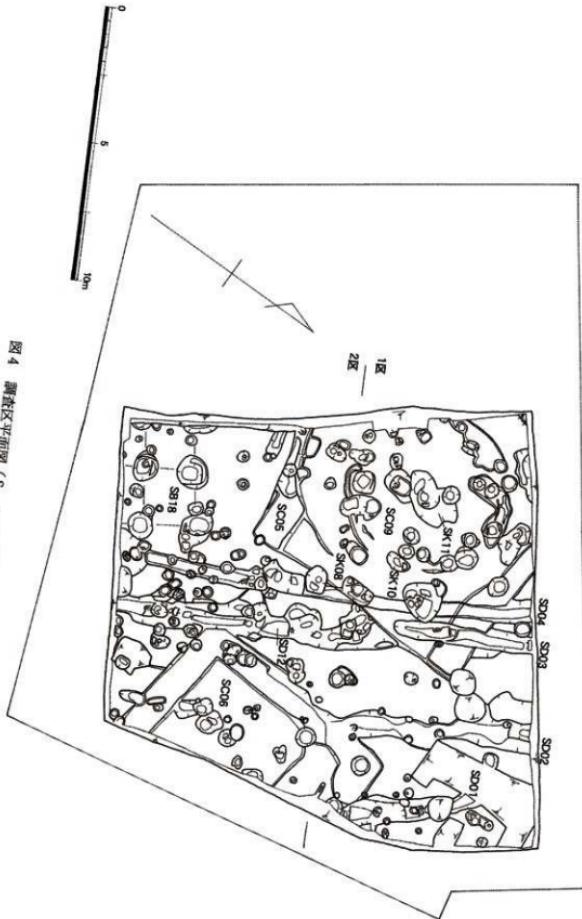


図3 調査区配置図 ( $S = 1/200$ )

数字は標高 (m)

图 4 调查区平面图 ( $S = 1 / 150$ )



## 第3章 調査の記録

### 1 調査の概要

調査対象地は、調査前の現況で標高9.3～9.4mを測り、南・東側隣地より約0.8m高くなっている。

調査は排土処理の関係から2回に分け、対象地の北半から開始した。北半を1区、南半を2区とした。遺構検出面までの土層堆積は、①バラス（地表面下20cm余りまで）、②褐色土（遺構検出面まで）で、③の最下層に中世の遺物が若干含まれていた。

遺構は地表面下60～80cmの鳥栖ローム層上面で検出した。弥生中期の円形竪穴建物1・土坑1、弥生後期の方形竪穴建物2・土坑2、古墳後期の溝1・掘立柱建物1、その他の溝・土坑、ピット100基余りである。出土遺物量はコンテナ14箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

### 2 遺構と遺物

#### 竪穴建物

##### SC05（図5、図版2）

調査区北西部で検出した。東西9.2m、南北9.6mの隅丸方形で、深さ0.4mである。北辺と南東部隅に地山削り出しのベッドを設ける。SD03・04に切られ、SC09を切る。土器片のほか鉄器・石器が出土している。土器片は凸レンズ状の平底片が含まれていることから、弥生後期後半に属す。

##### 出土遺物（図5、図版8）

1は石製穂摘具である。残存長12.0cm、幅4.1cm、厚さ0.8cm、孔径1.2cm、孔心々間長3.0cm。2は土製紡錘車である。3.5×3.1cm、厚さ0.6cm、孔径0.7cm。淡橙色を呈す。3は用途不明鉄製品である。残存長6.8cm、横幅1.1cm、厚さ4mmである。4は凹石である。径8.5×9.1cm、最大厚3.3cm、重さ390.5gの円盤で、表裏面の中央がへこんでおり、凹部の厚さは2.7cmである。

##### SC06（図6、図版3）

調査区東端部で検出した。東側調査区外に伸びる。東西5.2m以上、南北8.5mの隅丸方形で、深さ0.4mである。北・西・南の3辺に地山削り出しのベッドを設ける。土器片のほか鉄器・石器が出土している。土器片は凸レンズ状の平底片が含まれていることから、弥生後期後半に属す。

##### 出土遺物（図版8）

5は鉄製鋤先である。縦6.0cm、横12.0cm、厚さ2mmで、南側ベッド上で出土した。6は棒状鉄製品である。長さ11.8cm、断面は7×6mmの長方形をなす。鑿か。床面中央で出土した。7は径9.7×10.2cm、最大厚3.5cm、重さ553.5gの円盤で、磨石もしくは敲石とみられる。

##### SC09（図6、図版2）

SC05のはば中央、床面精査の過程で検出した。径6.1mの円形である。中央に土坑状の掘り込み（SK11）があり、その両側にピットが1つずつ並ぶ。これらに近接して床が赤く焼けて継ぎた部分が4ヶ所認められた。地床炉とみられる。これらを取り巻くように径0.45～0.85m、深さ0.5～0.9mのピットが配置される。ピット群は一部切り合いがみられ、少なくとも1回は建て替えがあったものと考えられる。5ヶ所のピットで柱痕跡が認められ、柱径は径0.2～0.3mに復元できる。弥生中期後半に属す。

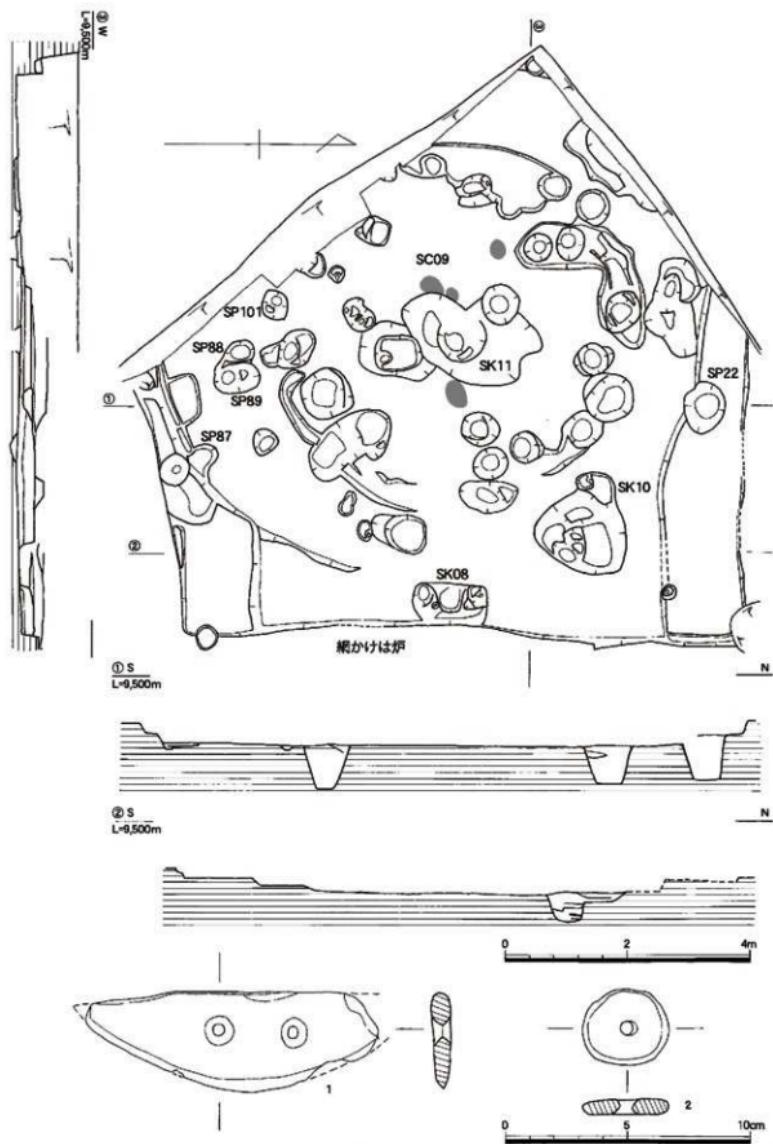


図5 SC05および出土遺物実測図 (S = 1/80, 1/2)

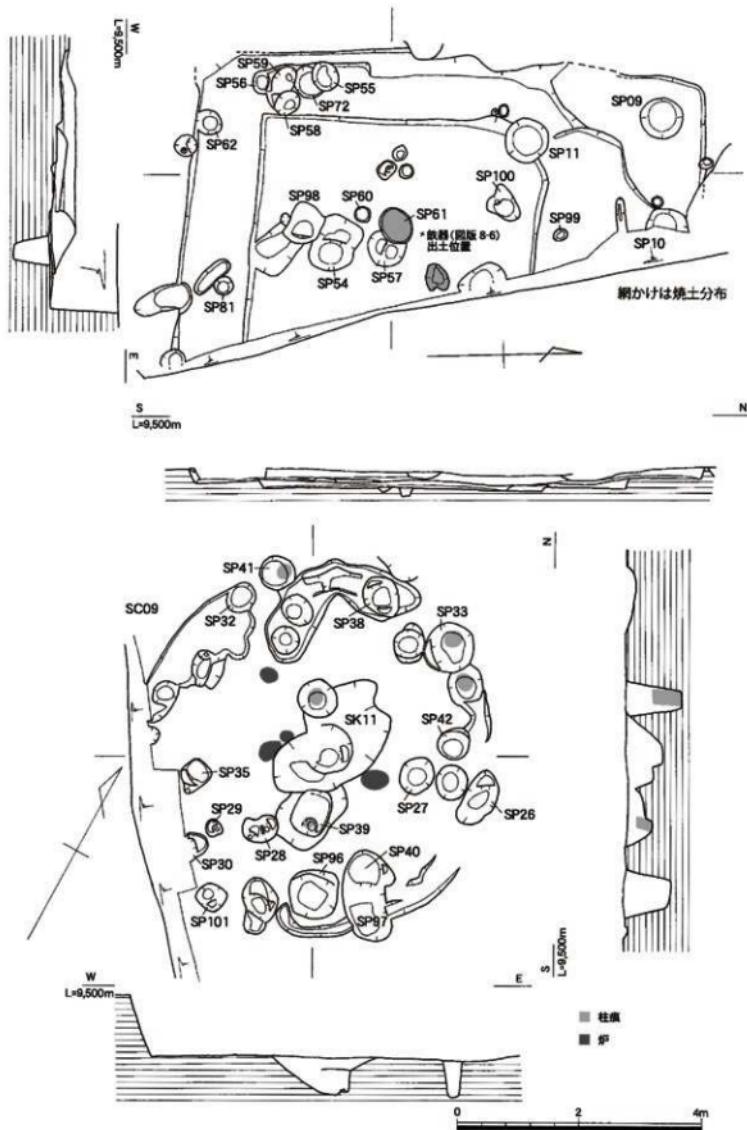


図6 SC06・09実測図 ( $S = 1/80$ )

## 土坑

### SK08 (図7、図版4)

S C 0 5 東辺で検出した。0.6×1.2mの長方形で、深さ0.24mである。S C 0 5 の作り付け土坑とみられる。上層から壺が出土している。

### 出土遺物 (図7、図版8)

8は弥生土器の壺である。口径8.6cm、器高9.1cm。黄褐色を呈し、胸部上半に黒斑がある。図上では無頸壺としているが、長頸壺の頸部分を打ち欠いたものの可能性がある。9は砂岩製の磁石である。縦13.5cm、横7cm、厚さ4.8cm、重さ825gで、両側面・表裏面を使用している。

### SK10 (図7、図版4)

S K 0 8 の北西1.1mの位置で検出した。東西1.65m、南北1.47mの隅丸三角形で、深さ0.45mである。弥生後期に属す。

### SK11 (図6、図版4)

円形整穴建物 S C 0 9 の中央に位置し、2.38×1.3m、深さ0.6mである。すり鉢状に下がり、中央が円形のピット状を呈す。位置関係から S C 0 9 の作り付け中央土坑とみるが、柱穴が重複している可能性も考えられる。

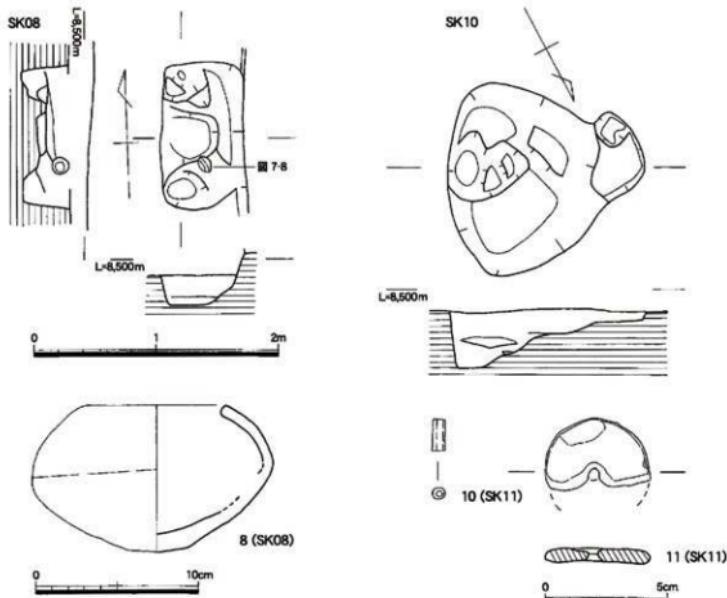


図7 SK08・10および出土遺物実測図 (S = 1/40, 1/3, 1/2)

#### 出土遺物（図7、図版8）

10は緑色凝灰岩製の管玉である。長さ1.3cm、幅0.5cm、孔径0.25cm。11は土製筋輪車である。径4.3cm、厚さ0.5cm、孔径0.5cm。片面が淡橙色、もう片面が黒灰色を呈す。

#### 溝

##### SD01（図8、図版5）

1区北東部で検出した。SC06を切る。長さ4m以上、幅0.6~0.8m、深さ0.18~0.3mである。弥生土器片が出土している。

##### SD02（図8、図版5）

1区北東部で検出した。SC06を切る。長さ7.1m以上、幅1.0~1.1m、深さ0.1~0.2mである。弥生土器・土師器・須恵器・青磁片が出土している。

##### SD03・12（図8、図版6）

調査区中央を南北方向に走る溝で、SC05を切る。長さ、幅0.73m、深さ0.34mである。古墳時代後期に属す。

#### 出土遺物（図9、図版9）

##### 須恵器（10~17）

12は杯蓋である。13~15は杯身である。15は底部に1本のヘラ描き線を施す。16は有蓋高杯である。脚部の取り付け部に2本セットのヘラ描き線を3ヵ所施す。17は高杯の脚部である。下半に5本のヘラ描き線を施す。18は壺である。頸部と胴部下半にカキ目を施す。胴部上半の2本の沈線の間は櫛目を施す。底部にV字のヘラ描き線を施す。胴部中に径1.4cmの穿孔を施すが、その際の円柱形の粘土塊が内部にそのまま残っている。頸部の口は孔径よりも小さく、粘土塊は取り出せない。このことから胴部を作り、頸部を接合し、全体の調整を施した後、穿孔を断面円形の棒状工具で外側から穿孔したもの、頸部の口が小さかったために、粘土塊を取り出せず、そのまま焼成したのであろう。19は小壺である。13~15、17~19はSC05の覆土を掘り下げる際に出土したもので、出土位置から本来SD03に伴うものであったとみられる。

##### SD04（図8、図版6）

調査区中央を南北方向に走る溝で、SC05を切る。長さ14.5m、幅0.5~0.8m、深さ0.07m~0.28mである。遺物は弥生土器・土師器・須恵器片のほか、内黒土器椀、瓦器碗片がみられ、直上の検出面で白・青磁片が出土している。平安時代末期~鎌倉時代初めか。

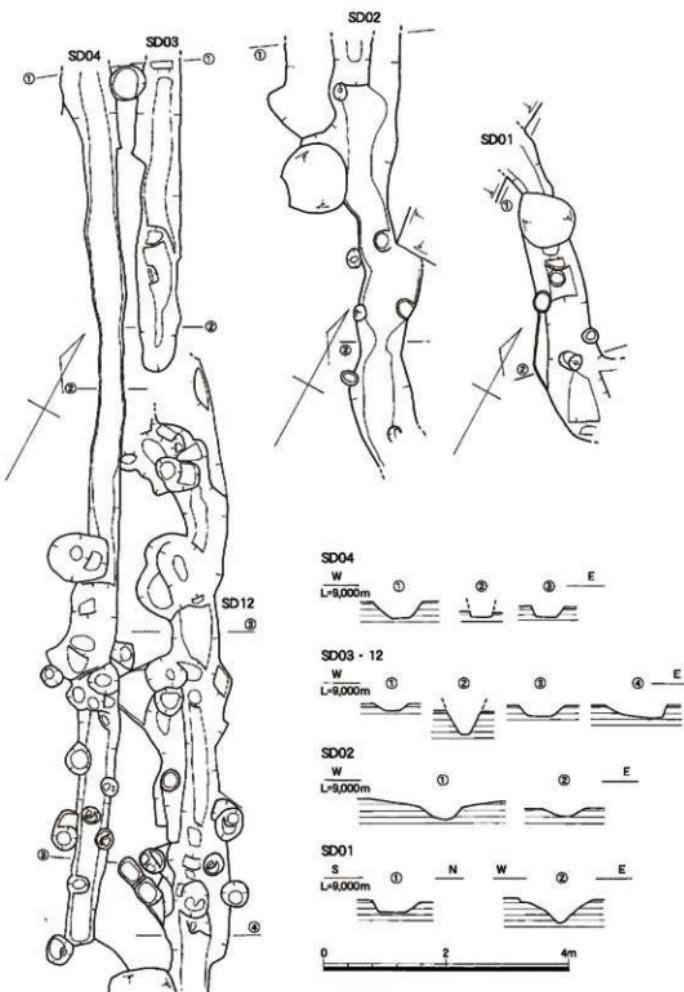


図8 SD01・02・03・04・12実測図 ( $S = 1/80$ )

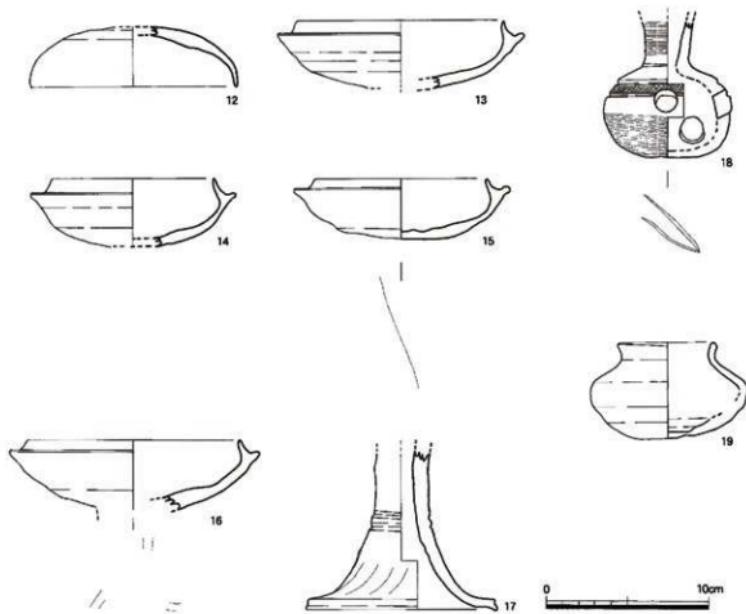


図9 SD03出土遺物実測図 (S = 1/3)

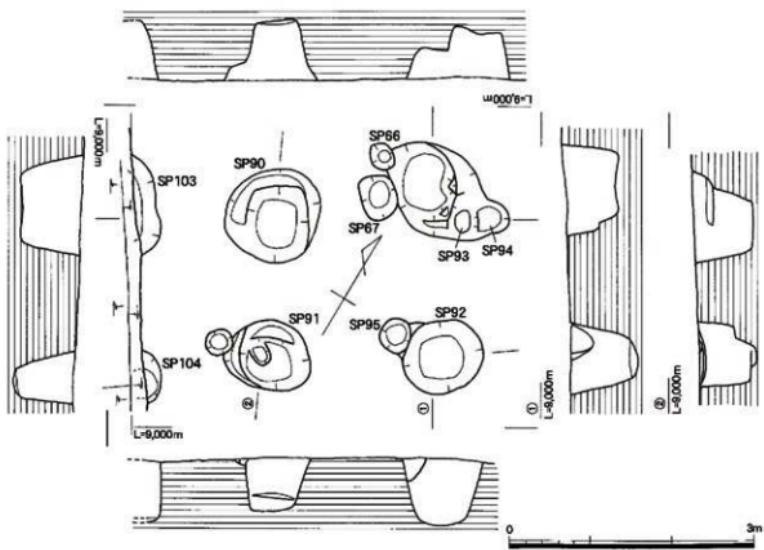


図10 SB18実測図 ( $S = 1/60$ )

#### 据立柱建物

##### SB18 (図10、図版7)

2区南西隅で桁行2間×梁行1間分を検出した。調査区外の西・南側に柱列が伸び、総柱になるものとみられる。柱間は2.0~2.2m、ピットの深さは0.7~0.8cmである。主軸は磁北より25°西偏する。各ピットから土師器・須恵器片が出土している。SP68・92から立ち上がりの矮小化した蓋杯の杯身片が出土していることから古墳時代後期に属す。

### 3 まとめ

本調査では、弥生時代と古墳時代の遺構を検出した。第2章で触れたように、本調査地の北隣で13次調査が実施されている。その成果と比較対照を行い、本報告のまとめとしたい。

まず遺構の時期区分について、13次調査報告ではⅠ期 弥生時代中期後半、Ⅱ期 弥生時代後期~古墳時代初頭、Ⅲ期 古墳時代終末~飛鳥時代、Ⅳ期 中世の4つに大きく分け、さらに各時期を数小期に分けてい る。

本調査で以上の各時期に該当する遺構は次のとおりである。

I期 SC09 II期 SC05・06 III期 SD03・12、SB18 IV期 SD04

## I期

13次調査では円形住居が4棟検出されている。柱の構造により、①炉を中心に4本の柱を方形に配置するものの(300・460)と②柱を円形または多角形に配置するもの(141・240)に分類できる。SC09は②に該当する。また中央土坑の両側に柱が立つ構造は、いわゆる「松菊里型」住居に類似する。この類型は早良区・有田遺跡群でもよく見られる。

## II期

SC09の真上にSC05が建てられている。これは建物位置に何らかの意味があったのか、単なる偶然か不明瞭であるが、興味深い事例である。SC05・06の建物主軸方向は揃っており、同時期の可能性が高い。13次調査でも同一方向の建物が検出されている(780・800)。ベッドも南北2辺に造られるもので、一つのまとまりをなしたものとみられる。

SC05の造り付け土坑とみられるSK08で出土した壺(図7-8)は、実測図上端面が生きているものとして処理した。しかし13次の弥生時代後期後半の井戸465の底面出土資料に細長い頸部を持つ壺の頸部を打ち欠いたものがあり、これによく類似する。本例も同様の可能性があり、祭祀上の共通性をうかがわせる。また凹石、磨石ないし敲石、砥石と鉄器の存在から、両整穴建物で小規模な手工業を行っていた可能性をうかがわせる。

## III期

13次溝795は6世紀末～7世紀初頭の溝で、陸橋状の断絶部を持ちながら円形をなし、本調査地へ向かっている。位置関係からSD02が溝795に接続するものとみられるが、出土遺物が少なく明確な年代を抑えられないことから断言は難しい。

SD03・12は出土した須恵器から、13次溝785と一連のものとみられるが、直線でつながるわけではなく、どのような性格を持つか判断しがたい。13次溝785は7世紀前半～中葉とみられている。

13次調査では当該期に縦柱の掘立柱建物が出現し、4棟検出されている。SB18はそれらと一連をなすものと見られる。一帯は倉庫が立ち並ぶ地域となっていたようである。

また13次調査では当該期の遺物として軒丸瓦片が出土しているが、本調査では出土しておらず、関連を探ることはできなかった。

## IV期

13次調査では龍泉窯系の劃花青磁碗を副葬する木棺墓555が検出されているが、本調査地点では遺構検出面上で青磁・瓦器碗片が少量出土した程度で、遺構としてはピットを除きSD04のみが唯一可能性のあるものである。

以上、簡略ではあるが、北隣の13次調査の調査成果と比較しながら時期別に本調査の調査成果を概観し、若干の考察を試みた。現状で遺構を保存している敷地内の他の部分や隣接地にも今後発掘調査が及ぶことにより、様相がより明確になるのを期待したい。



1区全景（南西から）



2区全景（南西から）



SC05・09 (東から)



SC09 (北から)



1区 SC06 (北から)



2区 SC06 (南から)



SK 08 (西から)



SK 10 (南東から)



SD01 (南東から)



SD02 (南東から)



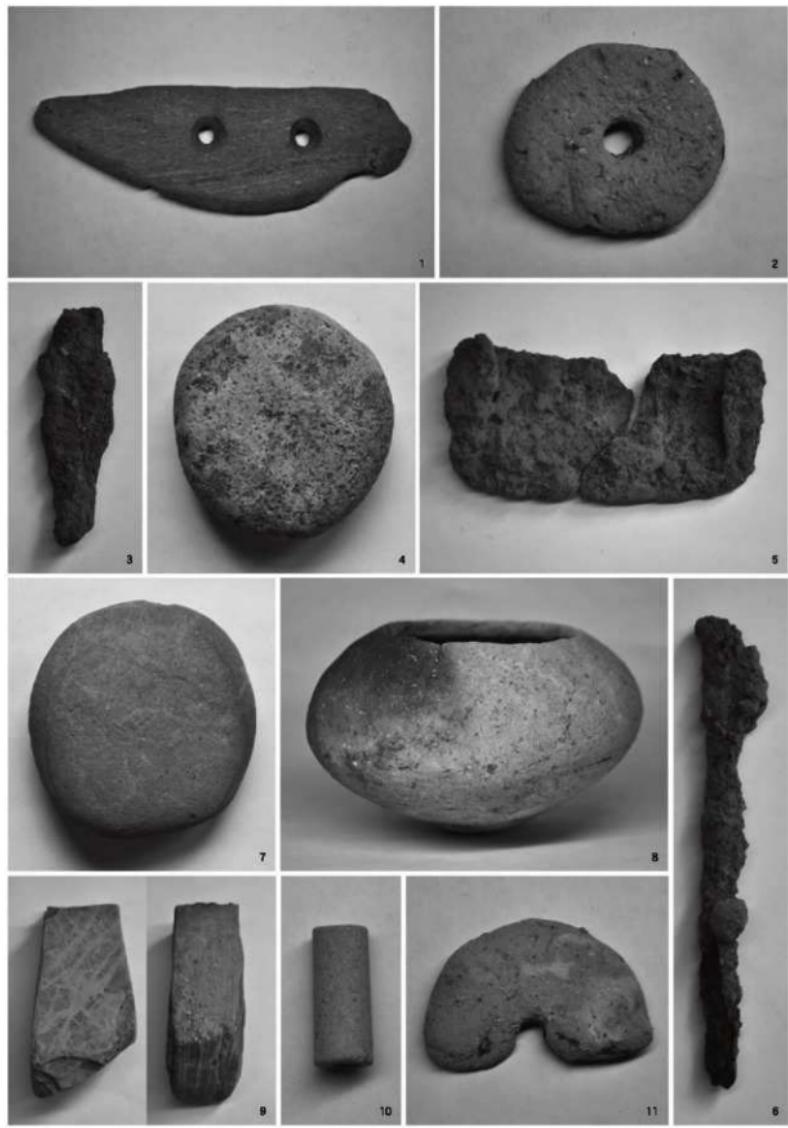
S D O 3 • 0 4 (南東から)



S D O 4 • 1 2 (南東から)



S B 18 (南西から)



出土遺物 1



出土遺物 2

## 報 告 書 抄 錄

| ふりがな                        | なか   |       |                         |                                |                       |                           |   |        |
|-----------------------------|--|-------|-------------------------|--------------------------------|-----------------------|---------------------------|---|--------|
| 書 名                         | 那珂 77  |       |                         |                                |                       |                           |   |        |
| 副 書 名                       | 那珂遺跡群第 161 次調査報告   |       |                         |                                |                       |                           |   |        |
| シリーズ名                       | 福岡市埋蔵文化財調査報告書  |       |                         |                                |                       |                           |   |        |
| シリーズ番号                      | 第 1336 集   |       |                         |                                |                       |                           |   |        |
| 編著者名                        | 木下博文   |       |                         |                                |                       |                           |   |        |
| 編集機関                        | 福岡市教育委員会   |       |                         |                                |                       |                           |   |        |
| 所 在 地                       | 〒810-8621 福岡市中央区天神 1-8-1   |       |                         |                                |                       |                           |   |        |
| 発行年月日                       | 2018 年 3 月 26 日  |       |                         |                                |                       |                           |   |        |
| ふりがな                        | ふりがな   | コード   |                         | 北緯                             | 東経                    | 発掘期間                      | 発掘面積<br>m <sup>2</sup>  | 発掘原因   |
| 所収遺跡名                       | 所在地  | 市町村   | 遺跡番号                    |                                |                       |                           |   |        |
| なかいせきぐん<br>那珂遺跡群<br>第 161 次 | ふくおかしはかたなか<br>福岡市博多区那珂<br>1 丁目 442-1、<br>442-5、439   | 40132 | 0085                    | 33 度<br>34 分<br>15 秒           | 130 度<br>26 分<br>12 秒 | 20160711<br>～<br>20161003 | 240   | 記録保存調査 |
| 所収遺跡名                       | 種別   | 主な時代  | 主な遺構                    | 主な遺物                           |                       |                           | 特記事項  |        |
| 那珂遺跡群                       | 集落跡  | 弥生～中世 | 竪穴建物、<br>掘立柱建物、<br>溝、柱穴 | 弥生土器、土解器、須恵器、<br>中国産磁器、石器、鐵器、玉 |                       |                           | 弥生時代中期の円形竪穴<br>建物、同後期後半～終末<br>の方形竪穴建物、古墳時<br>代後期の掘立柱建物・溝<br>などを検出 |        |
| 要 約                         | 那珂遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた標高 9 m の中位段丘上に立地する集落遺跡である。今回の<br>調査地点は遺跡の中心に当たり、西 100m のところに那珂八幡古墳が存在する。弥生時代中期～後期<br>の竪穴建物、古墳時代後期の掘立柱建物・溝、柱穴多数を検出した。 |       |                         |                                |                       |                           |   |        |

## 那珂 77

－那珂遺跡群第 161 次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1336 集

2018（平成 30）年 3 月 26 日

発 行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神 1-8-1

印 刷 株式会社 ハザマ印刷

〒815-0081 福岡市南区那の川 1-20-23